

【暗証聖句】

【日・第一のものを第一に】

コヘレトの言葉 12 章 1 節「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。「年を重ねることに喜びはない」と言う年齢にならないうちに。」

聖書は、若いうちに神様を知ることの大切さを教えています。その後の長い人生を、神様と共に歩むためです。それにより、安全に守られて、幸せを生きるためです。若者が大人へと成長するにつれて、衣食住という基本的な必要をどのように満たすのか、自分で考えなければならなくなりますが、創造主に心を留めるなら、まずすべきことが何か明確に教えられていることに気づかされるのです。それは、「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」と心配するのではなく、「何よりもまず、神の国と神の義を求めよ」ということです。そうするならば、衣食住の必要はすべて神様が与えて下さいます。このことを若い時から体験的に知っていくということが重要なのです。

創世記 28 章 20～22 節

「ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

ヤコブは、神様と不思議な出会いを経験した後、このように誓いました、その直後に起こったことは、一生の伴侶となる女性との出会いです。ヤコブは誓ったことを、結婚によって破棄することはできません。神様を第一とするということは、結婚をし、家族を持つようになるならば、家族全体の誓いでなければならなくなります。そのことを考えて、結婚相手を探さなければならぬわけですが、そのような伴侶を与えて下さるのも神様なのです。

【月・仕事の祝福】

創世記 2:15 「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。」

創世記2章15節を読むと、神様は人をエデンの園に住ませ、そこを耕し、守るようにされたと書かれています。園の中には見るからに好ましく、食べるに良いあらゆる木がありました。一見人間は何もせずとも生きていけるようにと、神様があらかじめすべてを整えられたかのように見えます。しかし、神様はアダムに園を耕し、守るという働きをさせるのです。やはり人間は何もせず、ただ食べて、寝てではだめになってしまいます。そもそも神様は人間をそのようにお造りになったのではないです。神様は天地創造のはじめから、人間に生きる目的と使命をお与えになったのです。

ところで、この「耕す」と訳されている言葉は、「働く」という意味の言葉です。興味深いのは、この働くという言葉が、もともと「仕える」という意味の言葉から来ているということです。名詞にすれば、「僕」とか、「奴隷」と訳される言葉なのです。つまり最初の人アダムに神様は、エデンの園で単に畑仕事をさせたのではなく、神様に仕え、神様の僕としての生活をさせたのです。それが、神様に造られた人間の本来の姿だったのです。興味深いのは罪を犯した後も、神様はアダムに同じ土を耕すことをさせられたことです。

創世記 3:23 「主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた」

アダムをエデンの園からは追い出されましたが、そこでも神様は土を耕すようにさせました。罪の結果、土は呪われましたので、罪を犯す前とは大きく異なる状況の中で土を耕すことになりました。そのために、額に汗しながら土を耕し、種を蒔き、苦勞して作物の実りを得なければならなくなりました。しかし、これは罰ではなく、逆に赦しなのです。土が呪われてもなお、種をまけば芽を出し、成長し、実を实らすのです。自らの罪を思いつつも、そこに神の創造の命の力を見、同時に赦しを見るのです。

【火・収入を得るための年月】

働いて収入を得る期間は人によって異なりますが、平均すれば40～50年くらいでしょうか。最近は元気な間は働きたいという人も増えているようですが、好きなことだけをして生きていくことができるのなら楽しいでしょうけれども、多くの人は、自分のためだけに働くわけではなく、家族を養うために働いています。そのため辛いことがあっても苦勞して、忍耐しながら働き続けているのです。テモテへの手紙一 5 章 8 節に、「自分の親族、特に家族の世話をしない者がいれば、その者は信仰を捨てたことになり、信者でない人にも劣っています」と書かれてある通りです。

しかし、箴言 14 章 23 節に、「どのような苦勞にも利益がある」とあるように、意味のない苦勞はありません。どのような苦勞であ

っても、必ずその人に何かしらの利益をもたらします。これは神様の約束です。それと共に、家族のためと思って働くだけでなく、主のために働くのだと考えることも大切です。コロサイ 3 章 23、24 節に、「何をするにも、人に対してではなく、主にに対してするように、心から行いなさい。あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです」と書かれてあります。主のためにはと思えば、空しい苦労はなくなり、感謝が生まれます。

ところでノンクリスチャンは家族に衣食住を提供し、子供に良い教育を受けさせることが養うことだと考えていることでしょう。しかし、クリスチャンはそれだけでなく、神様に仕える姿を通して、家族にも神様に仕えることの大切さを教えていきます。教会の礼拝に参加すること、忠実な仕え、神様への感謝など、小さいときから教えていくなれば、自然に受け入れていくことでしょう。あとになればなるほど、難しくなります。たとえば、小さな子どもにお小遣いを与える際に、十分の一は神様にお返しすることを教えていくなれば、大人になって収入を得るようになったときも、足り前のように、仕えをお返しするようになるでしょう。

【水・誠実に働くこと】

クリスチャンは単純に収入を得るためだけに働くことができれば気持ちも楽なのですが、常に周囲の人達の目にさらされ、クリスチャンとして見られています。コリント 10 章 31 節に、「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」と書かれてありますが、このみ言葉にプレッシャーを感じるという人もいられるかもしれません。

常に大切なことは、誠実さです。与えられた仕事一つひとつを、誠実にやっていくことです。不誠実だったり、いい加減だったりという人が多い世の中において、誠実な人はやはり大きな信頼を得るものです。それがクリスチャンだからということになれば、神様はその人を通して栄光を受けることになるでしょう。聖書の中で、その誠実さゆえに大きな信頼を得た人の一人にヨセフがいます。奴隷としてエジプトに売られたヨセフでしたが、誠実であるがゆえに、主人ポティファルから信頼を得て財産を任せられるようになり、無実の罪で獄に捕らわれたときも、やはりその誠実さゆえに、獄の責任を任せられるようになり、そして、極めつけは、エジプト王ファラオからも厚い信頼を得て、王に次ぐ地位を与えられたのでした。しかし、ただ誠実であっただけで、ここまで地位の上り詰めることはありません。その背後には、常に主が共におられました。

創世記 39 章 2～4 節「主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。彼はエジプト人の主人の家におられた。主と共におられ、主が彼のすることをすべてうまく計られるのを見た主人は、ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた。」

このように、ヨセフは誠実な人柄と、主と共におられる信仰のゆえに、神様を知らない人たちからも尊敬を受けることになったのです。

【木・神の助言を求めること】

聖書の中には、私たちの財産管理について、のべられている箇所があります。

箴言 27 章 24 節「財産はとこしえに永らえるものではなく・・・」

箴言 15 章 16 節「財宝を多く持って恐怖のうちにあるよりは、乏しくても主を畏れる方がよい。」

財産を永遠に持ち続けることはできないという当たり前のことを、まずしっかり覚えることは大切なことです。また、多くの財産を持つことで心配ごとが増えるとするなら、貧しくても主を畏れて生きるほうが良いと聖書は教えています。

箴言 6 章 6～8 節「怠け者よ、蟻のところに行って見よ。その道を見て、知恵を得よ。蟻には首領もなく、指揮官も支配者もないが、夏の間にパンを備え、刈り入れ時に食糧を集める。」

収入を右から左に使ってしまうのは愚かなことです。蟻から知恵を得よと聖書はいいいます。蟻は夏の間にしっかり食べ物を蓄えて冬に備えるように、私たちもしものために貯蓄する必要があります。貯蓄することが、主に信頼することに反しているのではないかと思う必要はありません。主は、夏の間に冬の分まで与えてくださったと理解すべきです。

箴言 22 章 7 節「金持ちが貧乏な者を支配する。借りる者は貸す者の奴隷となる」

これは以前も学びましたが、借金をしないようにという勧告です。

箴言 13 章 4 節「怠け者は欲望をもっても何も得られず、勤勉な人は望めば豊かに満たされる。」

神様は怠け者を嫌います。怠け者は何も得ることはできません。逆に、勤勉に働くことは神の子にふさわしいことです。もし望むなら、豊かに満たされます。